

# 土地分類基本調査

「金山」

5 万分の 1

國 土 調 査

岐 阜 県

1 9 9 0

# 序 文

この調査は、限られた資源である国土の実態を科学的かつ総合的に調査し、国土の開発、保全並びに高度利用に資することを目的として行っているもので、国土調査法に基づき本県では昭和57年度から実施しています。

本書は、昭和63年度に調査した5万分の1地形図「金山」について「金山」図幅として、取りまとめたものです。

この調査の実施に当たってご協力いただいた関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、この成果が今後、土地利用計画の企画・立案の基礎資料として有効に活用されることを希望します。

平成3年3月

岐阜県企画部長 山田 賢一

# ま え が き

1. 本調査は、岐阜県が国土庁土地局国土調査課の指導を得て、実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 本調査の実施、成果の作成機関及び担当者は、下記のとおりである。

## 記

総 括	岐阜県企画部地域振興課	課 長	奥村 恒雄
	〃	土地利用対策監	篠田 和美
	〃	土地計画調査 担当課長補佐	藤井 彰
	〃	技 術 主 査	幸田 延章
調 査 機 関			
地形分類調査	岐阜大学教育学部	教 授	関根 清
表層地質調査	〃	教 授	梶田 澄雄
	〃	助 教 授	小井土由光
土 壌 調 査	岐阜県農業総合 研究センター	主任専門研究員	古橋 勝幸
	岐阜県林業センター	専 門 研 究 員	中川 一
	〃	主 任 技 師	川尻 秀樹
	〃	技 師	茂木 靖和
土 地 利 用 現 況 調 査	岐阜大学農学部	教 授	網本 皓二

# 目 次

## 総 論

I 位置および行政区画 .....	1
II 人 口 .....	2
III 産 業 .....	4

## 各 論

I 地 形 分 類 .....	9
II 表 層 地 質 .....	14
III 土 壤 .....	21
IV 土地利用現況 .....	37

# 位置図



		下梨	白木峰	有峰湖	槍ヶ岳
		白川村	飛騨古川	船津	上高地
	越前勝山	白山	三日町	高山	刺鞍岳
	荒島岳	白鳥	萩原	御岳山	木曾福島
冠山	能郷白山	八幡	下呂	加子母	上松
横山	谷汲	美濃	63年度調査 金山	62年度調査 付知	62年度調査 妻籠
42年度調査 長浜 (経企庁)	57年度調査 大垣	58年度調査 岐阜	48年度調査 美濃加茂 (経企庁)	61年度調査 恵那	61年度調査 中津川
59年度調査 彦根東部	59年度調査 津島	名古屋北部	58年度調査 瀬戸	60年度調査 明智	60年度調査 根羽
	59年度調査 桑名				

総

論

# I 位置および行政区画

## 1. 位置

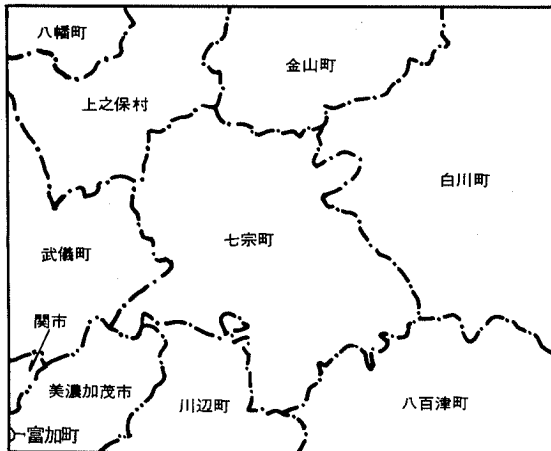
この調査の対象地域は、建設省国土地理院発行5万分の1地形図の「金山」図幅である。

経緯度は、東経 $137^{\circ} 00'$  ~  $137^{\circ} 15'$ 、北緯 $35^{\circ} 30'$  ~  $35^{\circ} 40'$  の範囲である。

## 2. 行政区画

本図幅の行政区域は、関市、美濃加茂市、武儀町、上之保村、八幡町、富加町、川辺町、七宗町、八百津町、白川町、金山町の2市8町1村からなっている。(図—1参照)

図—1 行政区画図



## Ⅱ 人 口

調査区域にかかる2市8町1村の人口は194,531人（平成2年国勢調査岐阜県早期集計結果）で県人口の9.4%を占めている。

これらの市町村では、昭和50年から平成2年までに約13,700人増加しており7.6%の増加となっている。これは、県平均の10.6%を下回っている。

表一1 人 口

行政区区域	昭 和 50 年		昭 和 55 年		昭 和 60 年	
	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)
関 市	53,881	13,472	59,192	15,171	64,149	17,246
美濃加茂市	37,524	9,469	39,531	10,431	41,700	11,583
武 儀 町	4,882	1,160	4,758	1,155	4,685	1,130
上之保村	3,207	824	2,968	801	2,902	778
八 幡 町	19,076	5,255	18,813	5,400	18,230	5,367
富 加 町	5,269	1,218	5,635	1,315	5,816	1,387
川 辺 町	10,083	2,465	10,255	2,615	10,371	2,707
七 宗 町	6,569	1,635	6,435	1,625	6,527	1,804
八 百 津 町	15,822	3,882	15,451	3,900	15,215	3,926
白 川 町	13,350	3,338	12,922	3,382	12,685	3,439
金 山 町	11,158	2,753	9,238	2,608	8,907	2,485
計	180,821	45,471	185,198	48,403	191,187	51,852
県 計	1,867,978	483,766	1,960,107	539,740	2,028,536	567,946



また、上之保村、八幡町、八百津町、白川町、金山町の各町村にあっては昭和50年当時から人口の減少がみられ、平成2年国勢調査岐阜県早期集計結果にもその傾向が依然としてあらわれている。

関市、美濃加茂市の両市にあっては、増加はしているものの増加率は小さくなっている。

平成2年		人口増減(人)			人口増減率(%)		
人口(人)	世帯数(戸)	50~55年	55~60年	60~2年	50~55年	55~60年	60~2年
68,386	19,287	5,311	4,957	4,237	9.9	8.4	6.6
43,013	12,667	2,007	2,169	1,313	5.3	5.5	3.1
4,700	1,157	△ 124	△ 73	15	△ 2.5	△ 1.5	0.3
2,767	744	△ 239	△ 66	△ 135	△ 7.5	△ 2.2	△ 4.7
17,620	5,317	△ 263	△ 583	△ 610	△ 1.4	△ 3.1	△ 3.3
5,898	1,408	366	181	82	6.9	3.2	1.4
10,650	2,914	172	116	279	1.7	1.1	2.7
6,097	1,614	△ 134	92	△ 430	△ 2.0	1.4	△ 6.6
14,731	3,940	△ 371	△ 236	△ 484	△ 2.3	△ 1.5	△ 3.2
12,118	3,236	△ 428	△ 237	△ 567	△ 3.2	△ 1.8	△ 4.5
8,551	2,507	△ 1,920	△ 331	△ 356	△ 17.2	△ 3.6	△ 4.0
194,531	54,791	4,377	5,989	3,344	2.4	3.2	1.7
2,066,569	602,903	92,129	68,429	38,033	4.9	3.5	1.9

資料 昭和50年、昭和55年、昭和60年の数値は国勢調査による

平成2年の数値は、平成2年国勢調査岐阜県早期集計結果による

### Ⅲ 産 業

#### 1 農 林 業

地域内の市町村の総農家数は、13,342戸で、これは県下総農家数の13.4%にあたる。

また、経営耕地面積は、8,133haで県下総耕地面積の11.9%を占めている。

この地域は、全般に畜産が農業粗生産額に占める割合が高く、中でも養鶏は関市・美濃加茂市、肉養牛は八幡町・関市、乳用牛は関市・美濃加茂市、養豚は関市・富加町において飼育が行われている。

表一2 農業の概要

区分 行政区域	農 家 数				経営耕地面積 (ha)	農 業 粗 生 産 額 (百万円)				
	総 数 (戸)	専 業 (戸)	兼 業 (戸)	専 業 率 (%)		総 額	米	野菜	畜産	その他
関 市	2,783	82	2,701	2.9	2,150	5,181	1,541	673	2,627	340
美濃加茂市	2,403	140	2,263	5.8	1,670	4,144	848	665	1,766	865
武 儀 町	637	32	605	5.0	271	312	151	56	69	36
上之保村	410	9	401	2.2	172	187	76	24	34	53
八 幡 町	1,154	34	1,120	2.9	688	1,319	397	167	593	162
富 加 町	506	31	475	6.1	434	1,850	243	243	1,121	243
川 辺 町	769	35	734	4.6	365	626	174	181	144	127
七 宗 町	631	43	588	6.8	283	444	134	58	110	142
八百津町	1,485	73	1,412	4.9	773	1,407	378	181	683	165
白 川 町	1,791	60	1,731	3.4	946	1,671	486	120	456	609
金 山 町	773	26	747	3.4	381	511	170	70	163	108
計	13,342	565	12,777	4.2	8,133	17,652	4,598	2,438	7,766	2,850
県 計	99,394	4,335	95,059	4.4	68,600	160,464	45,678	36,163	56,247	22,376

資料 岐阜県農林水産統計年報（平成元～平成2年）による

したがって、畜産の粗生産額の割合が多くなっている。また、白川町では、お茶の生産が多く「白川茶」として銘柄化されている。(表—2)

林野面積は、98,919haで県下総林野面積の11.3%となっている。(表—3)

表—3 林業の概要

行政区 区域	林 野 面 積 (ha)				林 家 数 (戸)
	総 数	国 有 林	公 有 林	私 有 林	
関 市	4,482	0	141	4,341	1,640
美濃加茂市	3,230	18	111	3,101	1,063
武 儀 町	5,825	63	484	5,278	616
上之保村	4,420	—	270	4,150	507
八 幡 町	22,364	141	468	21,755	1,590
富 加 町	794	—	9	785	156
川 辺 町	2,874	0	184	2,690	577
七 宗 町	8,312	1,524	549	6,239	953
八 百 津 町	10,470	148	1,147	9,175	1,352
白 川 町	20,952	0	373	20,579	1,975
金 山 町	15,196	323	540	14,333	997
計	98,919	2,217	4,276	92,426	11,426
県 計	871,617	182,815	69,441	619,361	64,537

資料 平成元年度岐阜県林業統計書による

林家数は、岐阜県農林水産統計年報（平成元年～平成2年）による

## 2 工 業

この地域の工場数は県下総工場の13.0%にあたる3,450事業所であり、従業員数は31,851人で県総数の11.2%を占める。

また、年間製造品出荷額は6,173億円で県全体の11.7%を占めている。(表—4)

表—4 工業の概要

区分 行政 区域	工 場 数				従 業 者 数 (人)			年間製造品 出 荷 額 等 (万円)
	総 数	会 社	組 合 其 他 の 法 人	個 人	総 数	常 用 者 及 び 労 働 者	個 人 事 業 主 及 び 家 族 従 業 者 数	
関 市	1,843	494	5	1,344	13,649	11,511	2,138	22,754,411
美濃加茂市	360	143	2	215	6,395	6,072	323	23,698,801
武 儀 町	142	29	—	113	899	709	190	519,237
上之保村	50	8	2	40	337	277	60	402,690
八 幡 町	203	70	3	130	2,041	1,829	212	2,118,867
富 加 町	119	35	—	84	1,123	1,005	118	1,974,431
川 辺 町	143	45	—	98	2,180	2,020	160	3,968,294
七 宗 町	68	14	—	54	754	665	89	1,102,610
八百津町	267	57	—	210	1,873	1,522	351	2,328,550
白 川 町	141	40	3	98	1,218	1,064	154	1,295,336
金 山 町	114	40	3	71	1,382	1,272	110	1,571,021
計	3,450	975	116	2,457	31,851	27,946	3,905	61,734,248
県 計	26,592	8,164	289	18,139	284,264	254,455	29,809	526,439,723

資料 平成元年工業統計調査結果による

### 3 商 業

商店数は3,585店舗で県下総商店数の9.6%、また、年間販売額は3,603億円で県全体の6.7%となっている。(表一5)

表一5 商業の概要

行政 区域	商 店 数			従 業 者 数 (人)	年 間 販 売 額 (百万円)
	総 数	卸 売 業	小 売 業		
関 市	1,182	242	940	5,293	181,093
美濃加茂市	825	127	698	4,043	109,704
武 儀 町	69	6	63	182	1,783
上 之 保 村	47	3	44	120	1,192
八 幡 町	500	53	447	1,741	26,843
富 加 町	74	4	70	259	3,964
川 辺 町	142	9	133	485	6,944
七 宗 町	87	6	81	222	2,920
八 百 津 町	235	22	213	748	8,031
白 川 町	225	17	208	717	9,316
金 山 町	199	16	183	681	8,473
計	3,585	505	3,080	14,491	360,263
県 計	37,161	8,332	28,822	176,197	5,376,986

資料 昭和63年商業統計調査結果による(代理商・仲立業を除く)

# 各 論

# I 地形分類

## 1 地形概説

日本はアジアプレートと太平洋プレートの会合部にあたるユーラシア大陸縁辺部に位置する弧状列島からなる。そのために東北地方から中部地方を経て近畿地方北部に至る地域はほぼ東西圧縮応力場に位置する地域といえる。このような地殻運動の影響をうけて山地の尾根や河谷などの地形の分布には規則性が認められる。

日本アルプスから近畿地方北部を経て中国地方の東北部に至る地域には南北方向に軸をもつ東高西低の曲隆・曲降の地形がみられる。これらの曲隆・曲降地形の波長は70km~100kmのひろがりをもっている。東から西へ日本アルプス、両白山地、比良山地、但馬山地などが曲隆部の地塊に位置し、飛騨高原から美濃高原・三河高原、近江盆地や琵琶湖、敦賀湾から水上盆地などが曲降部の地塊にあたるといわれている。このように中部地方から近畿地方北部に至る地域の大地形はこれらの曲隆・曲降の地殻運動によって形成された地形であり、ほぼ南北方向にその軸をもち東西方向に交互に配列するという分布特徴を示している。

上述した曲隆・曲降運動の進展にともなって傾斜の変換部の地域にあたる地域には応力が集中し、歪みの蓄積のために逆断層が多発し、曲隆部の地塊を一層隆起させ、断層山地が形成される。それ故に曲隆部と曲降部の境にはほぼ南北方向の逆断層が認められる場合が多い。これらの逆断層と共役関係にある副断層が応力軸に直交状に発生している。

また、急激な圧縮応力が加わると応力軸に斜交するせん断性の横ずれ断層が多発するようになる。結果として東西圧縮応力場にあたる中部地方においては北東から南西、北西から南東方向の横ずれ断層も卓越している。

以上のように地殻運動の特徴を反映させて中部地方における断層は、概略的には南北方向、東西方向、北東から南西方向、北西から南東方向への断層系として捉えられる。それ故に、曲隆、曲降運動に起因した大地形はこれらの断層系によって地塊状に細分され、それぞれの断層系の運動形態を反映さ

せながら複雑な地殻運動を結果的には行なってきた。これらの環境を反映させて中部地方における河谷は上述の4方向からなるものや、これらの組み合わせからなるものが卓越している。

本図幅の地域は、上述した曲隆・曲降運動のうちの曲降部にあたる美濃高原(山地)の南部に位置している。本図幅内の山地は東部山地の標高が約800~600mであるの対して、西部山地の標高は約400~200mとなり、東高西低の傾動地塊運動の結果を反映させた分布を示している。

図幅の南西部から中央部の飛騨川右岸に至る地域には地質構造と侵蝕に対する抵抗性の差異を反映した組織地形が卓越している。組織地形の卓越する地域は中・古生界の砂岩・泥質岩・チャートからなり、チャートからなる山地が急崖をもって、凹部を形成している砂岩・泥質岩の山地を逆「く」の字状に帯状に縁どる形で頂稜線を形成している。平面的には逆「く」の字型の組織地形も形態的には数個の単位から成り立っているが飛騨川の右岸でその東端を形成して終っている。

飛騨川は中山七里で先行性の峡谷をうがち、再び金山以南の美濃高原南端部で先行性の峡谷を形成して美濃加茂盆地において木曾川に合流している。

## 2 山地・丘陵

本図幅内の山地は中部地方的観点からは上述したように曲降性の山地からなる美濃山地の南部に位置している。本図幅内の河谷の方向性からも明らかのように北東から南西方向と北西から南東方向の河谷が卓越し、これらが中部地方特有の断層系に起因した現象であったが、このことは当然のことながら山地においてもいえる。このために本図幅内の山地はこれらの断層系によって山地塊的に細分される。

本図幅内の山地を、ここでは佐見山地、二ツ森山地、見行山山地、七宗山地、上之保山地、郡上・美濃山地、に細分した。

### (1) 佐見山地 (Ia)

伏見山地は東に尾城山(1132.9m)、西に高天良山(908.0m)をもつ、阿寺



断層及び加子母川、白川、飛驒川によって包囲された山地である。北東から南西方向へ高度をさげる標高1,100mから800m内外の定高性の山頂部からなる山地である。佐見山地には北西から南東方向、北東から南西方向の河谷が卓越している。本図幅には佐見山地の南西部が位置している。

## (2) ニツ森山地 (I b)

ニツ森山地は最高峰をニツ森山 (1,223.3m) とする美濃山地の南部に位置する山地である。美濃山地南部は、北西から南東方向の赤河断層によってニツ森山地と見行山山地に二分され、北東から南西方向に高度を漸減する傾動地塊からなる山地である。ニツ森山地は北東方向を阿寺断層によって阿寺山地と南西端を赤河断層によって見行山山地と、そして北西端を白川の河谷によって佐見山地と境される、高度約1,200m～600mに山頂を有する定高性の山地といえる。地質的には南部が花崗岩類からなるものの、その主要部は濃飛流紋岩類からなり、濃飛流紋岩からなる山地には形成時期の異なる麓層面が山腹斜面から山麓斜面にかけて顕著にみられる。

本図幅には西端部の一部地域が含まれている。

## (3) 見行山山地 (I c)

見行山山地は赤河断層以西の地域で、飛驒川によって東端、北端、西端を、そして木曾川によって南端を境された山地である。高度905mの見行山を最高点とし、東高西低の傾動地塊運動を反映させた高度約700mから200mに平坦面を有する定高性の丘陵性山地である。八百津町久田見附近には高度約500mの山頂部に平坦面がみられる。これらの山頂部の小起伏面は辻村 (1929) によって前輪廻の隆起準平原とされてきた。

## (4) 七宗山地 (I d)

七宗山地は、水晶山 (687.4m) を中心に、東端から南端を飛驒川、西端を飛驒川支流の神湫川、北端を飛驒川支流の菅田川によって区切られる山地である。南部には組織地形の東端部が位置し、ここで飛驒川は顕著な先行谷を

形成している。

#### (5) 上之保山地 (I e)

上之保山地は飛驒川と津保川とで境される山地で御前ヶ岳 (663.7m)、高岡山 (603m)、岳山 (599.0m) 梶現山 (524.7m) などの山々からなる。北高南低の定高性の山地で南部にはロックコントロールによるチャートの山稜線からなる組織地形が顕著にみられる。

#### (6) 郡上・美濃山地 (I f)

郡上・美濃山地は津保川と長良川とで境された長良川左岸に位置する山地である。高度600m未満から400m内外の山頂部からなる北高南低の定高性の山地である。南部には北西から南東方向にのびるチャートを山稜線とする組織地形が認められ、景観的には晩壮年期の山地景観を呈している。

### 3 丘陵

本図幅には蜂屋丘陵の北部地域が位置している。

#### (1) 蜂屋丘陵 (II a)

蜂屋丘陵は本図幅の南西端に分布する。地形的には北高南低の高度約300mから100m未満の丘陵である。この丘陵は開析が進み、谷底平野が丘陵にくいこみ、支尾根が発達している。中新統の安山岩質凝灰角礫岩ないし、火山角礫岩からなる蜂屋層を主体とする丘陵からなるが、蜂屋丘陵南部においては土岐砂礫層相当層と考えられるチャート、流紋岩などの径2～10cmの円礫及び亜円礫からなる砂礫層がのる地形面が形成されている。

### 4 台地

本図幅には美濃加茂台地の北端部が位置している。

#### (1) 美濃加茂台地 (III a)

本図幅に位置する美濃加茂台地は、美濃加茂盆地を埋積する低位河岸段丘

堆積物からなる台地である。この台地面が美濃加茂盆地を広く埋積している。本図幅には飛騨川沿いにその北端部が分布するのみである。この台地を構成する砂礫層（段丘礫層）は礫径15～5 cmの円礫で、その層厚は5 m程度である。本図幅内に点在する台地（河岸段丘）は、この美濃加茂台地の低位段丘面と対比される段丘面である。

## 5 参考文献

- 木曾 敏行（1959）：恵那盆地の地形発達について 地理評32 365～373  
〃 （1963）：木曾川流域の地形発達 地理評36 87～109  
桑原 徹（1968）：濃尾盆地と傾動地塊運動 第四紀研究7 235～247  
辻村 太郎（1929）：日本地形誌 古今書院

## Ⅱ 表層地質

### 1 表層地質概説

本図幅地域に最も広く分布しているのは固結堆積物の美濃帯中・古生層であるが、地域によって大きな差がある。分布の南3分の2は砂岩とチャートの互層が基本で、南部分では向斜構造をなし、北部分では背斜構造をなしていると考えられる。

この地域のチャート層はきわだって急峻な山地形になっているのに対し、砂岩層の分布地域はゆるやかな地形をしている。このように岩石・地層の浸食に対する抵抗力が地形に現れたものは組織地形と呼ばれている。図幅南西辺の関市甘屋から「美濃」図幅南東辺にかけてレンズ状の石灰岩とチャートを挟む泥質岩が広く分布する。この泥質岩は前述の砂岩・チャート互層とは岩相が大きく異なること、「美濃」図幅にまたがる分布状態からみて、異質の岩体で両者はみかけ上泥質岩上位の衝上断層関係にあると考えられる。

図幅西辺富之保付近を頂点にし西に開く馬蹄形状に礫岩を主とする地層が分布する。これは和田野礫岩層と呼ばれ石灰岩・緑色岩・泥質岩を伴う。

図幅北側3分の1の上之保村から金山町菅田桐洞にかけては、前述の南側に較べみかけ上複雑な岩層配列をしている。メランジとして着色したものは、泥質岩・砂岩・チャートの互層がいったん崩壊し再堆積したものである。中・南部の砂岩・チャートの互層地域に較べ組織地形の発達は悪い。

岩相の相違・分布から両者は北側がみかけ上、上位の衝上断層関係にあると考えられる。

東辺には火山性岩石の濃飛流紋岩が「付知・上松」図幅から連続して分布する。溶結したものと非溶結のものに分けられる。さらにこれらを噴出した火道を埋めた角礫岩が岩脈状に分布している。

花崗岩は八百津町上吉田付近ほかに散在する。斑岩類の分布には特徴があり、特に図幅北辺には東西性の走向をもつ岩脈群が見られる。

蜂屋層と命名された火山角礫岩を主とする新生代の地層が図幅の南西辺付近に分布する。粘土・砂・礫よりなる固結堆積物が、図幅中央南辺の川辺町

下吉田・八百津町野々古屋の比較的高所に分布するが、「美濃加茂」図幅中の第三紀層のいずれに対比されるかはっきりしない。

図幅南東辺近くの八百津町久田見付近は飛騨川よりの比高が350m以上の高原状の平地で地形学では「久田見の準平原」として名高い。この高原は「土岐砂礫層」と呼ばれる新第三紀の半固結の砂礫層に覆われている。

未固結堆積物中碎屑物としたものは「付知・上松」図幅に較べて非常に少ない。礫がち堆積物（段丘）としたものは川辺町の飛騨川ぞいに発達している。

## 2 表層地質細説

### (1) 未固結堆積物

#### a) 礫がち堆積物 ( $g_1$ )

この図幅で礫がち堆積物としたものは、飛騨川・津保川・神淵川およびそれらの支谷を埋積して分布する沖積層である。ほとんどが耕作地あるいは宅地として利用されている。

#### b) 礫がち堆積物 ( $g_2$ )

各河川ぞいにみられる河岸段丘がこれに相当するが、図幅中で塗色しうるほどの広がりを持つ所は飛騨川ぞいの上麻生・中麻生・本郷付近である。礫は亜円～円礫が多い。

#### c) 碎屑物 ( $c_1$ )

碎屑物は本図幅東隣の「付知・妻籠」図幅内では濃飛流紋岩分布地域に緩斜面を形成して大量に分布するが、本図幅内のものは山間地に小規模に分布し砂質の基質をもつことから前者とは異なり単なる局地的な崩壊堆積物である。

### (2) 半固結堆積物

a) 礫および粘土 (gc)

本堆積物は瀬戸層群上部の土岐砂礫層に該当する。図幅内では八百津町久田見高原全面および関市伊深町に分布する。

ほとんど濃飛流紋岩起源の円礫よりなり、スコップで削れるほど風化が進んでいる。

(3) 固結堆積物

a) 粘土・砂および礫 (tsm)

これに該当する堆積物は図幅南辺の中央の檜原から上吉田へ至る道路ぞい・中麻生下・下吉田付近の3地域である。粘土質および凝灰質砂が基質の角礫層である。固結の程度からみて中新世の堆積物と思われる。

b) 凝灰質角礫岩または火山角礫岩 (tb)

図幅南西辺のみに分布する。中村層群下部蜂屋累層に該当する。灰黒色の安山岩質の細～巨礫を主体とし一般に角礫～亜角礫である。基質も凝灰質で珪化木を産する。

c) 砂岩 (ss)

図幅中チャートとともに広範囲に分布する。チャート分布地域に較べ相対的になだらかな地形をなすことが多い。

砂岩は本来強硬な岩石であるが風化が進みもろくなっていることが多い。新鮮な部分は碎石の原材料として良好である。

d) 泥質岩 (sh)

関市甘屋付近に分布するもの以外は帯状に小規模に分布するにすぎない。剥離面に富み砂岩に較べ風化されていることが多い。

関市甘屋付近にまとまった分布を示す泥質岩は珪質でチャート・石灰岩のレンズを挟むなど特異な産状を示すことや分布の状態からみて周囲のものとは異質の岩体と考えられる。

e) チャート (ch)

図幅内の分布は広い。極めて強硬で風化に強いいためチャートの分布域は急峻な山地を成すことが多い。地形図上露岩の記号のあるところはチャートであることが多い。厚さ3～5 cmの層が薄い泥質物を挟んでくりかえし互層し、小褶曲をすることが多い。

f) 礫岩 (cg)

和田野礫岩と呼ばれるもので図幅西辺中央部に東に開いた馬蹄形状に分布する。砂岩・頁岩・チャート・緑色岩・石灰岩などの中礫が主体である。

g) メランジ (m)

図幅北辺にほぼ東西にわたって分布する。泥質の基質中に砂岩・チャートなどのブロックが雑然と入っている。成因についてはいろいろ考えられるが、図幅内のは海底での地滑りによるものであろう。

h) 石灰岩 (ls)

和田野礫岩に伴うものと関市甘屋の泥質岩に伴うものがあるが、いずれも小岩体である。

i) 玄武岩溶岩および火山性碎屑岩 (sch)

かつての大洋底に噴出した玄武岩溶岩と凝灰質碎屑物の残片と考えられている。緑灰色のことが多く、かつては輝緑凝灰岩と呼ばれていた。その色調から単に緑色岩と呼ぶこともある。上記の石灰岩と密接に伴って産出することが多い。

(4) 火山性岩石

a) 流紋岩質岩石 (溶結) (Ry<sub>1</sub>)

濃飛流紋岩の主体をなす岩相であり、図幅内の東部にひろく分布する。

石英、斜長石、カリ長石の結晶片を多量に含み、少量の有色鉱物を伴う流

紋岩質～流紋デイサイト質の溶結凝灰岩からなる。岩相や岩質の相違から4枚の溶結凝灰岩層に区分され、全体に堅硬である。

b) 流紋岩質岩石 (非溶結) ( $Ry_2$ )

濃飛流紋岩のうち溶結凝灰岩層をのぞく火山性碎屑岩に相当し、溶結凝灰岩層に挟まれて分布する。図幅内では、飛驒川にそう濃飛岩体と美濃帯構成岩類との境界付近に、両者をまたぐように分布する。

おもに凝灰角礫岩ないし火山角礫岩、非溶結の凝灰岩類や凝灰質砂岩・泥岩などからなり、薄い溶結凝灰岩層を伴う。全体に堅硬である。

c) 火道角礫岩 ( $Ry_3$ )

非溶結の流紋岩質岩石 ( $Ry_2$ ) の一部を噴出させた火道を埋めている角礫岩であり、濃飛岩体全体においてもとくに本図幅地域内で多くみられる。

みかけ上は火山角礫岩あるいは凝灰角礫岩であり、岩相上は非溶結の流紋岩質岩石 ( $Ry_2$ ) と大差はなく、全体に堅硬である。岩脈状に産することから区別した。

(5) 深成岩

a) 花崗岩質岩石 (Gr)

濃飛岩体と美濃帯構成岩類との境界付近や図幅北部の御前ヶ岳周辺に小規模な岩体として分布する河岐石英閃緑岩と、図幅南部の八百津町上吉田地域と南東縁部の八百津町伽藍地域にそれぞれ小規模な岩体として分布する八百津花崗岩がある。いずれも美濃帯中・古生層を貫き、それらに強い熱変成作用を与えているが、河岐石英閃緑岩は濃飛流紋岩の一部に覆われる (資料9)。

河岐石英閃緑岩は、おもに細～中粒の角閃石黒雲母石英閃緑岩からなる。黒雲母のK-Ar年代は約87Maで (資料10)、濃飛流紋岩に先だつ火成活動で形成されたもので、全体に堅硬である。

八百津花崗岩は、おもに優白色で細～中粒の角閃石黒雲母花崗岩～花崗閃緑岩からなる。黒雲母のK-Ar年代は約68Maで (資料5)、中津川市周辺に分



布する苗木花崗岩や土岐市周辺に分布する土岐花崗岩に相当するといわれているが、両花崗岩に特徴的にふくまれる黒色ないし暗灰色の石英や晶洞状ペグマタイトはほとんど伴われない。全体に風化がすすんでおり、一部で赤土様あるいはマサになっている。

#### b) 花崗斑岩 (Gp)

花崗斑岩は濃飛流紋岩に密接に伴われる貫入岩類であり、花崗斑岩と花崗閃緑斑岩にわけられる。花崗斑岩は、図幅の北部で小規模な岩体が東西方向にはしる岩脈群として、あるいは図幅南東部で北西—南東方向にのびる比較的大きな岩体としておもに分布する。花崗閃緑斑岩は、濃飛岩体内に比較的大きな岩体として分布する。

花崗斑岩はカリ長石の斑状結晶を伴い、微晶質の基質をもつ。花崗閃緑斑岩はカリ長石・石英・斜長石の斑状結晶を伴うが、基質は全体に完晶質である。いずれも堅硬な岩石として産する。

### 3 資料

- 1) 足立 守・水谷伸治郎 (1971) 美濃帯古生層の sole markings と古流系について. 地質学論集, no. 6, p. 39—48.
- 2) 木戸 聡 (1982) 岐阜県七宗村上麻生における三疊紀チャートとジュラ紀珪質岩の産状について. 大阪微化石研究会会誌特別号, no. 5, p. 135—151.
- 3) Mizutani, S. (1964) Superficial folding of the Palaeozoic system of central Japan. Jour. Earth Sci. Nagoya Univ. vol. 12, p. 17—83.
- 4) 野村隆光 (1986) 岐阜県南東部, 中新統蜂屋累層の地質 (予報) と K—Ar年代. 地質学雑誌. vol. 92, p. 73—76.
- 5) 柴田 賢・Miller, J. A. ・山田直利・河田清雄・村山正郎・片田正人 (1962) カリウム—アルゴン法によって測定された伊那川花崗岩および苗木花崗岩の絶対年代. 地調月報. vol. 13, p. 317—320.

- 6) 脇田浩二 (1985) 美濃帯中・古生界における研究史と最近の研究動向.  
地球科学 vol. 39, p. 18—30.
- 7) Wakita, K. (1988) Early Cretaceous melange in the Hida-Kanayama  
area, central Japan. Bull. Geol. Surv. Japan, vol. 39, p. 367—408.
- 8) Wakita, K. (1988) Origin of chaotically mixed rock bodies in the  
Early Jurassic to Early Cretaceous sedimentary complex of the Mino  
terrane, central Japan. Bull. Geol. Surv. Japan, vol. 39, p. 675—742.
- 9) 山田直利・河田清雄・諸橋 毅 (1971) 火砕流堆積物としての濃飛流  
紋岩. 地球科学, vol. 25, p. 52—88.
- 10) 山田直利・柴田 賢・佃 栄吉・内海 茂・松本哲一・青山秀喜・高木  
秀雄 (1990) 阿寺断層の活動史に関する新データ.  
地調月報, vol. 41, p. 408—409.

# Ⅲ 土 壤

## 林 地 土 壤

本図幅の地形は、小起伏の美濃高地が広く分布し、標高の最高が白川町白山862mで最低が約200mである。この高地を飛騨川がほぼ北から南へ蛇行して流れている。南西部には、東濃丘陵がわずかに分布する。

土壌は、大部分の地域で褐色森林土が分布する。岩石地がチャートの露岩地に分布する。乾性ポドゾル化土壌は飛騨川西部の主にチャートのヤセ尾根で小面積分布する。

本図幅に出現する土壌は、表一1土壌統一覧表に示すとおり3土壌群、6土壌統群に分けられる。

### 1 岩石地

岩石地は、チャートが露岩する地域で小面積分布する。植生は、モチツツジ、ソヨゴ、ウスノキ、ネジキ、ヒトツバ、ススキ、コシダ等が生育する。

図幅の南部、中央部に小面積分布する。

### 2 褐色森林土

褐色森林土は、本図幅の大部分を占める。主に尾根と斜面上部では、乾性褐色森林土壌が分布する。

乾性赤色系褐色森林土壌は、主に緩傾斜の山頂、尾根に小面積分布する。斜面中、下部では、褐色森林土壌が広く分布する。湿性褐色森林土壌は、谷頭、斜面下部に小面積分布する。

#### (1) 乾性褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌は、BA、BB、BC型土壌に相当し、曾木統、高戸山1統、高根権現1統、笠置1統、蜂屋統、柿野統の6統が分布する。

乾性褐色森林土壌は、土層上部で乾性な細粒状、粒状、堅果状構造が発達

する。生産力が低い。チャートに分布する曽木統は、BA型土壌の分布が多く、土層も薄いため、とりわけ生産力が低い傾向である。

植生は、大部分が天然アカマツ林である。混交する上木の樹種は、コナラ、ヒノキ、ヒメコマツ、タカノツメ、サクラ類等が生育する。下層植生は、モチツツジ、ヤマツツジ、コバノミツバツツジ、イヌツゲ、ウシカバ、ソヨゴ、ウスノキ、コウヤボウキ、ネジキ、コナラ、アラカシ、ヒサカキ、コバノガマズミ等が生育する。

#### ① 曽木統

主に中生界の砂岩、粘板岩、チャート等を母材として、丘陵、山地の尾根に分布する残積性の土壌である。A<sub>0</sub>層は、F、H層が厚く発達する。A層、B層は、主に粒状構造が発達する。A層は、チャートのヤセ尾根で、細粒状構造の発達することが多い。多くの土壌は、B層に赤色風化の影響がある。土性は、埴壤土である。図幅の全体に分布する。

#### ② 高戸山1統

花崗岩類、花崗斑岩類を母材として、山地の尾根、斜面上部に分布する残積性の土壌である。A<sub>0</sub>層は、約10cmと厚く、特にF層がよく発達する。A層は、5cm以下であり発達しない。A層、B層上部で細粒状構造、B層下部で粒状構造の発達することが多い。土性は、埴壤土である。図幅の北部に小面積分布する。

#### ③ 高根権現1統

花崗岩類、花崗斑岩類を母材として、丘陵の尾根、斜面上部に分布する残積性の土壌である。A<sub>0</sub>層は、厚く発達する。A層は、数cm以下であり発達しない。A層、B層上部で細粒状構造、B層下部で粒状構造の発達することが多い。土性は、砂壤土から埴壤土である。図幅の東南部に分布する。

#### ④ 笠置1統

濃飛流紋岩類を母材として、山地の尾根、斜面上部に分布する残積性の土壌である。一般的に未熟土的傾向の土壌である。非溶結岩母材の土壌は、溶結岩よりも未熟土的傾向が強く、砂質の傾向である。A<sub>0</sub>層は、約10cmと厚く、特にF層がよく発達する。A層は、薄くあまり発達しない。特に乾性の強い土壌では、H—A層となりA層が発達しない。土性は、埴壤土から埴土である。石礫が多い。図幅の東部に分布する。

#### ⑤ 蜂屋統

新第三系凝灰角礫岩を母材として、丘陵の尾根に分布する残積性の土壌である。A<sub>0</sub>層は、約5cmと比較的厚く発達する。未熟土的傾向が強く、A層の発達が悪い。一般に、A層では粒状構造、B層では塊状構造が発達する。B層下部では礫が多い。土性は、埴壤土である。図幅の南西部に小面積分布する。

#### ⑥ 柿野統

未固結堆積物を母材として、丘陵の尾根に分布する残積性の土壌である。未固結堆積物には、砂礫が多い。A<sub>0</sub>層は、約5cmと比較的厚く発達する。A層は、薄くあまり発達しない。A層、B層上部は、粒状構造の発達することが多い。B層は、円礫が多い。図幅の南部に小面積分布する。

### (2) 乾性赤色系褐色森林土壌

乾性赤色系褐色森林土壌は、 $rBA$ 、 $rBB$ 、 $rBC$ 型土壌に相当し、雨乞1統、平岩統、久須見統、大藪統の4統が分布する。

乾性赤色系褐色森林土壌は、赤色風化の影響がある赤褐色のB層と、A層、B層上部が細粒状、粒状、堅果状構造の乾性土壌構造とにより特徴づけられる。

乾性赤色系褐色森林土壌として図示した範囲の中には、B層で赤色系褐色森林土壌よりもさらに赤みの強い赤色土壌が小面積混在する。

植生は、主にアカマツ天然林である。混交する上木は、ヒメコマツ、ヒノ

キ、コナラ、アベマキ、リョウブ等である。植林地の場合には、ヒノキ林となる。下層植生は、モチツツジ、コバノミツバツツジ、ヒノキ、ネズミサシ、ソヨゴ、ウシカバ、アセビ、イヌツゲ、ネジキ、ウスノキ、ヤマウルシ、ネザサ、サルトリイバラ、シシガシラ等が生育する。

#### ① 雨乞1統

主に中生界の砂岩を母材として、丘陵、山地の緩傾斜の尾根に分布する残積性の土壌である。A<sub>0</sub>層は、一般に厚く発達するが、林地利用が多くて未熟土的傾向が強い場合には厚く発達しない。A層は、粒状構造で薄い。B層下部は、塊状構造の発達することが多い。土性は、A層、B層上部が埴壤土、B層下部が埴土である。図幅の中央部、南部に小面積分布する。

#### ② 平岩統

花崗岩類、花崗斑岩類を母材として、丘陵、山地の緩傾斜の尾根および斜面に分布する。A<sub>0</sub>層は、一般に厚く発達するが、林地利用が多くて未熟土的傾向が強い場合には薄い。A層は、あまり発達しない。A層、B層上部は、細粒状から粒状構造の発達することが多い。土性は、埴壤土から埴土である。図幅の東南部に小面積分布する。

#### ③ 久須見統

濃飛流紋岩類を母材として、丘陵、山地の緩傾斜の尾根および斜面に分布する残積性の土壌である。一般的に未熟土的傾向の土壌である。A<sub>0</sub>層は、マツ林ではF層が厚く発達する。A層は、薄くあまり発達しない。A層、B層上部では粒状構造が発達する。B層は一般に礫が多い。土性は、B層上部では埴壤土、B層下部では埴土である。図幅の東部に小面積分布する。

#### ④ 大藪統

未固結堆積物を母材として、丘陵の緩傾斜の尾根に分布する残積性の土壌である。A<sub>0</sub>層は、一般に厚く発達するが、林地利用が多く未熟土的な土壌

では発達しない。A層は、細粒状から粒状構造で、あまり厚くない。B層は、塊状構造の発達することが多い。B層上部は壤土で、B層下部は埴壤土である。図幅の南部、中央部に小面積分布する。

### (3) 褐色森林土壌

褐色森林土壌は、B<sub>D</sub>、B<sub>D</sub>(d)型土壌に相当し、久田見統、高戸山2統、高根権現2統、笠置2統、塩河統、鹿塩統の6統が分布する。

褐色森林土壌は、主にA層で団粒状構造が発達することにより特徴づけられ、生産力が高い。久田見統のなかで、赤川左岸のホルンフェルス化した堆積岩類が土壌母材として混入する地域では、特に生産力が高い。

植生は、コナラ林、アベマキ林、コナラとアカマツの混交林等の天然林、又は、スギ、ヒノキ植林地が多い。混交する上木は、アラカシ、クリ、リョウブ、サクラ類等である。下層植生は、アオキ、チャ、ツバキ、サカキ、シキミ、ヒサカキ、アラカシ、シロモジ、クロモジ、バイカツツジ、コアジサイ、ネザサ、ショウジョウバカマ、ジャノヒゲ、シシガシラ、ベニシダ、キジノオシダ等が生育する。

#### ① 久田見統

主に中生界の砂岩、チャート等を母材として、丘陵の斜面、山地の斜面に分布する土壌である。A<sub>0</sub>層は、ほとんど発達しない。A層は、一般に斜面中、上部では団粒状から粒状、塊状構造が発達する。斜面下部では団粒構造が発達する。B層下部は、一般に角礫が多い。土性は、壤土から埴壤土で、下部ほど埴質が強い。図幅の全体に分布する。

#### ② 高戸山2統

花崗岩類、花崗斑岩類を母材として、山地の斜面中、下部に分布する。A<sub>0</sub>層は、ほとんど発達しない。A層上部は、黒く団粒状から粒状構造が発達する。A層はあまり厚くない。B層は、塊状構造の発達することが多い。石礫は少ない。土性は、砂壤土から埴壤土である。図幅の北部、西部に小面積分

布する。

### ③ 高根権現 2 統

花崗岩類、花崗斑岩類を母材として、丘陵の斜面中、下部に分布する。A<sub>0</sub>層は、ほとんど発達しない。A層上部は黒く団粒状構造が発達し、A層下部では腐植の混入が少なく、塊状構造が発達することが多い。A層はあまり厚くない。石礫は少ない。土性は壤土である。図幅の南東部に小面積分布する。

### ④ 笠置 2 統

濃飛流紋岩類を母材として、山地の斜面中、下部に分布する。A<sub>0</sub>層は、ほとんど発達しない。A層は、比較的薄く、A層上部では黒く、団粒状構造の発達することが多い。B層では構造なしが多い。石礫は、溶結凝灰岩母材の土壤では多く、非溶結凝灰岩母材の土壤では少ない。土性は、埴壤土から埴土である。図幅の東部に広く分布する。

### ⑤ 塩河統

未固結堆積物を母材として、丘陵の斜面下部に分布する。未熟土的な傾向が強い。A<sub>0</sub>層は、ほとんど発達しない。A層への腐植の混入は少なく、塊状から団粒状構造が発達する。B層は、塊状構造から構造なしである。石礫は少ない。土性は、埴壤土である。図幅の南部に小面積分布する。

### ⑥ 鹿塩統

新第三系凝灰角礫岩等を母材として、丘陵の斜面中、下部に分布する。未熟土的な傾向が強い。A<sub>0</sub>層は、ほとんど発達しない。A層は、比較的薄く、腐植の混入が少なく淡い色である。A層は、塊状から団粒状構造が発達する。B層は、構造なしが多い。石礫は少ない。土性は、砂壤土から壤土である。図幅の南東部に広く分布する。

## (4) 湿性褐色森林土壤



湿性褐色森林土壌は、BE、BF型土壌に相当する。石礫が少ない場合、A層は約20cm以下で、B層は、かべ状構造が発達することが多く、灰色が強い土色となる。石礫の多い場合、A層は黒褐色で、よく団粒構造が発達し約40cm以上と厚い。

植生は、主にスギ、ヒノキ植林地となっているが、ヒノキ林では徳利病の被害が多い。下層植生は、スゲ類、オカトラノオ、シャガ、ホトトギス類、オオバノイノモトソウ等が生育する。

図幅の西部に小面積分布する。

### 3 ポドゾル

ポドゾルは、A<sub>0</sub>層から生産される腐植酸の影響により、A層に溶脱層があらわれてさらにB層に集積層があらわれるか又はB層に集積層のみがあらわれる土壌である。乾性ポドゾル化土壌のPDⅡ、PDⅢ型土壌が主に分布し、ヤセ尾根に分布する。ポドゾルは、生産力が低く、ヒノキ、アカマツ、ヒメコマツ、コウヤマキ等の常緑針葉樹林となっている。

図幅の中央部に小面積分布する。

表一 1 土壤統一覽表

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統	母 材	地 形
岩 石 地	岩 石 地	—	—	—
褐色森林土	乾性 褐色森林土壤	曾 木 統	中・古生界堆積岩	丘陵尾根、山地尾根
		高 戸 山 1 統	花崗岩、花崗斑岩類	山地尾根、斜面上部
		高根権現 1 統	花崗岩類、花崗斑岩類	山地尾根、丘陵尾根、斜面上部
		笠 置 1 統	濃飛流紋岩類	山地尾根、斜面上部
		蜂 屋 統	新第三系凝灰角礫岩	丘陵尾根
		柿 野 統	未固結堆積物	丘陵尾根
	乾性赤色系 褐色森林土壤	雨 乞 1 統	中・古生界堆積岩	丘陵尾根、山地尾根
		平 岩 統	花崗岩類、花崗斑岩類	丘陵尾根、斜面上部、山地緩斜面
		久 須 見 統	濃飛流紋岩類	丘陵尾根、斜面上部、山地緩斜面
		大 藪 統	未固結堆積物	丘陵尾根
	褐色森林土壤	久 田 見 統	中・古生界堆積岩	丘陵斜面、山地斜面
		高 戸 山 2 統	花崗岩類、花崗斑岩類	山地斜面中、下部
		高根権現 2 統	花崗岩類、花崗斑岩類	丘陵斜面中、下部
		笠 置 2 統	濃飛流紋岩類	山地斜面中、下部
		塩 河 統	未固結堆積物	丘陵斜面下部
		鹿 塩 統	新第三系凝灰角礫岩	丘陵斜面中、下部

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統	母 材	地 形
褐色森林土	湿性 褐色森林土壌	—	中・古生界堆積岩	山地斜面下部、谷頭
ポドゾル	乾性 ポドゾル化土壌	—	—	山地尾根

## 農 地 土 壤

### 1. 地域の概要

本地域は濃尾平野の東北部に位置し、白川町、七宗町、上之保村、武儀町のほぼ全域及び川辺町、八百津町、金山町、八幡町及び美濃加茂市の一部からなっている。

農地は飛騨川の中流域、飛騨川の支流である神淵川、白川の流域及び長良川の支流である津保川流域の各沖積地、丘陵台地及び山麓傾斜地に分布している。

このうち水田の大部分は地域内の河川沿いに分布し、また樹園地、茶園地及び草地等の畑地は丘陵台地及び山麓傾斜地に分布しており、それぞれ水稻、野菜、果樹、茶、及び桑が栽培されている。

土壌は地形、地勢が複雑であるため、各種の土壌群が存在している。水田土壌では灰色低地土及び黄色土が主体となっており、以下グライ土、多湿黒ボク土、褐色低地土及び黒ボクグライ土も散在している。また、畑地土壌では黄色土及び岩屑土が主体となっており、以下黒ボク土及び褐色低地土も散在している。

### 2. 土壌統群の分布

岩屑土は白川町、武儀町を主体に山麓傾斜地に分布している。

黒ボク土のうち、水田に利用されている厚層腐植質多湿黒ボク土壌は武儀町、表層腐植質多湿黒ボク土壌は七宗町を主体に分布している。また、黒ボクグライ土壌は武儀町にわずか散在している。一方、畑地に利用されている表層腐植質黒ボク土壌は七宗町、厚層多腐植質黒ボク土壌は白川町を主体に分布している。

黄色土壌のうち、水田に利用されている黄色土壌は白川町に分布しており、その他、武儀町、上之保村、八百津町、金山町に散在している。一方、畑地に利用されている黄色土壌は白川町、川辺町、八百津町に多く分布している。また、れき質黄色土壌は白川町、七宗町に散在している。

褐色低地土のうち水田に利用されている褐色低地土壌は白川町及び七宗町、

れき質褐色低地土壌は金山町にそれぞれ分布している。一方、畑地に利用されているれき質褐色低地土壌は武儀町及び上之保村、褐色低地土壌は川辺町及び七宗町に分布している。

灰色低地土のうち水田に利用されている細粒灰色低地土壌は白川町、上之保村、八百津町、七宗町及び川辺町に多く分布している。灰色低地土壌は七宗町、白川町、金山町及び上之保村に分布している。粗粒灰色低地土壌は武儀町、上之保村、七宗町及び金山町に分布している。

グライ土のうち細粒グライ土壌は武儀町、川辺町、七宗町、白川町、金山町及び八百津町の一部に分布している。また、グライ土壌は七宗町、八百津町の一部、白川町に分布している。

### 3. 土壌群別細説

#### (1) 岩屑土 (01)

土性は、強粘質～壤質。30cm以内から砂礫層となり、山地・丘陵地斜面に分布する。排水は極めて良く、一般に土壌が浅く、桑園・樹園地等に利用されるが、表土の厚さ、有機物含量・養分の供給保持力・保水力等の面で欠陥が認められる。

#### (2) 黒ボク土 (03, 04, 05)

土性は、壤質～粘質。腐植含量は富む～頗る富む。母材は火山噴出物からできた土壌で、保肥力が低く、りん酸や塩基類が乏しい (03)。多湿黒ボク土 (04) は、台地の凹部または沖積低地凹部に分布し、不良な排水条件にできた土壌である。黒ボクグライ土 (05) は、多湿黒ボク土と同様にほぼ全層がグライ層で、下層にしばしば泥炭や黒泥が混在する。

#### (3) 黄色土 (10)

土性は、強粘質～壤質。腐植含量は少ない。土色は黄色味が強く、丘陵地に分布し、強酸性で塩基性に乏しい。この土壌は保肥力・養分供給力等に基本的な欠陥が認められる。

#### (4) 褐色低地土 (12)

土性は、強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は、ほぼ全

層が褐色を示し、微高地に分布し、排水が良く、腐植含量が少ない。

(5) 灰色低地土 (13)

土性は、強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は、ほぼ全層が灰色または灰褐色を示す。沖積地帯に分布するが、グライ土に比べて地下水位が低く、排水が良く、腐植含量が少ない。この土壌は保肥力が強く、養分供給能に富み、高い水稻生産力を示し、本県の水田土壌としてはかなり特異的である。

(6) グライ土 (14)

土性は、強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は、青灰色で、グライ層の現れる位置で細分化される。沖積地帯に分布し、排水が悪く、腐植含量は一部を除いて少ない。

4. 市町村別、土壤統群面積一覧表

(1) 水田の部

市町村名	土壤群名	土壤統群名	土壤群番号	分布面積 (ha)	備考
美濃加茂市	褐色低地土	褐色低地土壤	1 2	28	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である。
	灰色低地土	細粒灰色低地土壤	1 3	258	
		灰色低地土壤	1 3	21	
		粗粒灰色低地土壤	1 3	147	
	グライ土	グライ土壤	1 4	56	
		粗粒グライ土壤	1 4	35	
武儀町	黒ボク土	多湿黒ボク土壤	0 4	25	
		黒ボクグライ土壤	0 5	15	
	黄色土	黄色土壤	1 0	67	
	灰色低地土	灰色低地土壤	1 3	25	
		粗粒灰色低地土壤	1 3	48	
	グライ土	細粒グライ土壤	1 4	28	
上之保村	黒ボク土	多湿黒ボク土壤	0 4	3	
	黄色土	黄色土壤	1 0	34	
	灰色低地土	細粒灰色低地土壤	1 3	25	
		灰色低地土壤	1 3	18	
		粗粒灰色低地土壤	1 3	42	
八幡町	黄色土	黄色土壤	1 0	30	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である。
	灰色低地土	細粒灰色低地土壤	1 3	186	
		粗粒灰色低地土壤	1 3	74	
川辺町	黒ボク土	多湿黒ボク土壤	0 4	14	同上
	黄色土	黄色土壤	1 0	15	
	褐色低地土	褐色低地土壤	1 2	4	
	灰色低地土	細粒灰色低地土壤	1 3	80	
	グライ土	細粒グライ土壤	1 4	74	

市町村名	土壌群名	土壌統群名	土壌群番号	分布面積 (ha)	備考
川辺町	グライ土	グライ土壌	14	2	
七宗町	黒ボク土	多湿黒ボク土壌	04	10	
	褐色低地土	褐色低地土壌	12	24	
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	54	
		灰色低地土壌	13	45	
		粗粒灰色低地土壌	13	6	
	グライ土	細粒グライ土壌	14	12	
グライ土壌		14	29		
八百津町	黄色土	黄色土壌	10	85	当図幅における 分布面積は左記の 分布面積の一部で ある。
	褐色低地土	褐色低地土壌	12	27	
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	148	
		粗粒灰色低地土壌	13	48	
	グライ土	細粒グライ土壌	14	148	
		グライ土壌	14	42	
白川町	黒ボク土	多湿黒ボク土壌	04	18	
	黄色土	黄色土壌	10	175	
	褐色低地土	褐色低地土壌	12	50	
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	110	
		灰色低地土壌	13	35	
		粗粒灰色低地土壌	13	109	
	グライ土	細粒グライ土壌	14	98	
グライ土壌		14	9		
金山町	黄色土	黄色土壌	10	53	当図幅における 分布面積は左記の 分布面積の一部で ある。
	褐色低地土	褐色低地土壌(砂礫質)	12	49	
	灰色低地土	灰色低地土壌	13	42	
		粗粒灰色低地土壌	13	57	
	グライ土	細粒グライ土壌	14	26	



## (2) 畑地の部

市町村名	土 壤 群 名	土 壤 統 群 名	土 壤 群 号	分 布 面 積 (ha)	備 考
美濃加茂市	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	85	当図幅における 分布面積は左記の 分布面積の一部で ある。
武 儀 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	34	
	黄 色 土	黄 色 土 壤	1 0	9	
	褐色低地土	褐色低地土壌 (砂礫質)	1 2	72	
上之保村	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	70	
	褐色低地土	褐色低地土壌 (砂礫質)	1 2	36	
八 幡 町	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	0 3	130	当図幅における 分布面積は左記の 分布面積の一部で ある。
	黄 色 土	黄 色 土 壤	1 0	44	
川 辺 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	20	同上
	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	0 3	20	
	黄 色 土	黄 色 土 壤	1 0	80	
	褐色低地土	褐色低地土壌	1 2	70	
七 宗 町	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	0 3	8	
		黒 ボ ク 土 壌	0 3	95	
	黄 色 土	黄 色 土 壤	1 0	30	
	褐色低地土	褐色低地土壌	1 2	20	
八百津町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	44	当図幅における 分布面積は左記の 分布面積の一部で ある。
	黄 色 土	黄 色 土 壤	1 0	100	
白 川 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	86	
	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	0 3	60	
	黄 色 土	黄 色 土 壤	1 0	203	
金 山 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	0 1	103	当図幅における 分布面積は左記の 分布面積の一部で ある。
	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	0 3	58	
		黒 ボ ク 土 壌	0 3	16	

## 5. 資料

- (1) 岐阜県農業試験場（1977）水田および畑地土壌生産性分級図
- (2) 岐阜県農政部（1978）地力保全基本調査に基づく土壌管理方針
- (3) 農業技術研究所化学部土壌第3科（1983）農耕地土壌の分類—土壌統  
の設定基準および土壌統一覧表（第2次案改訂版）—
- (4) 土壌保全調査事業全国協議会（1986）土壌断面をどう見るか

## IV 土地利用現況

### 1 農 地

本図幅中の各市町村にあつては、農家総数の約96%が兼業農家である。経営耕地は8,133haで農作物作付けの主体は米であるが、白川町においては、麦も作付けされている。

この地域は、全般に畜産の占める割合が高く農業粗生産額では、畜産が7,766百万円となっており、米の4,598百万円を上回っている。

本図幅の大半の市町村の林野率が80%を超えており、農用地としての土地利用は、金山町、白川町を南下する飛騨川及び七宗町を南下する支流の神淵川、白川町を西流する支流の白川、上之保村、武儀町、関市を南下する長良川支流の津保川に沿った地域において、水田が多くみられる。

また、飛騨川の支流で白川町を西流する白川に沿った段丘地には、お茶の栽培が盛んで「白川茶」として銘柄化されている。

### 2 林 地

本図幅内の林野率は高く、特に白川町、金山町をはじめとしたこの森林地域は、桧の生産地として知られている。

こうした森林資源を背景に、白川町、七宗町では木材木製品製造工場が県下の他地域に比べ多くなっている。

### 3 市街地・集落等

本図幅のほぼ中央部を南に蛇行して流れる飛騨川、それに並行して走る国道41号線沿線には、川辺町、七宗町、白川町、金山町の市街地・集落が形成されている。

また、八百津町久田見地区の準平原部にも集落の形成が見られる。

この他、飛騨川支流の菅田川、佐見川、白川、赤川、神淵川、長良川支流の津保川沿いに走る県道、市町村道沿いにも集落が形成されている。

1991年3月

印刷発行

岐阜県土地分類基本調査

「金 山」

発行 岐阜県企画部地域振興課

〒500 岐阜市藪田1-1

電話 (0582) 72-1111

印刷 日新印刷株式会社

岐阜市蔵前7丁目12番21号